

かずよし
大牟田 一美

鹿児島県

鹿児島県屋久島の永田浜は北太平洋最大のアカウミガメの産卵地で、絶滅危惧種のアカウミガメ保護を介して砂浜を守ろうと昭和60年に「屋久島ウミガメ研究会」を発足し、同島でウミガメの生態調査・研究及び環境保全・啓発活動などを行っている。ウミガメの上陸シーズン中の上陸回数や産卵回数、子ガメのふ化状況などの生態調査、県内外に向けての情報発信を続けている。全国から集まるボランティアと協力して、見学者に対し、ウミガメについての啓発や、浜の清掃や松などの植樹を行い、ウミガメとウミガメが上陸する環境の保全を広く啓発するために「うみがめ館」の運営を行っている。

NPO 法人
屋久島うみがめ館代表

1985年、屋久島で最も美しい砂浜を守ろうとウミガメを主役にして「屋久島ウミガメ研究会」を地元の若者達と立ち上げました。当時、海浜の砂の採取などにより浜砂は子供の頃よりも半分以下に減り、なお海砂の採取が続いていました。

5年間、ウミガメの生態調査・保護を行うと始めた活動が、2年目で殆んど会員がいなくなり、3年目からは一人で浜を歩くことが多くなってきました。それもそのはず、5月から7月の間、一晩中起きてウミガメの生態調査と盗掘や大波などで流される卵の保護を行うには、体力と気力に加え睡眠不足との戦いでした。

屋久島に来る若者を捕まえては長期の活動を手伝って頂き32年間も続いてきました。砂浜の採取は、活動を始めた次の年には行われず、3年目に鹿児島県は浜を守ってくれることを約束し、砂の採取は中止になり、痩せた浜の補給のために川砂を浜に養浜をしてもらうようになりました。

1998年、鹿児島県は日本で初めての「ウミガメ保護条例」を施行し、ウミガメの保護に努めました。また、2002年に永田の浜が国立公園、2005年にラムサール条約湿地登録、2006年に国立公園法によってウミガメが保護指定動物に、2016年にはエコパークに登録されて、ウミガメは形式上保護されるようになりましたが、観光地化が進んでいます。

1993年、屋久島が世界の自然遺産に登録されてからウミガメの見学者は4倍以上に増え、ウミガメの生態に悪影響を及ぼすようになりました。その結果、7月で終了していた親ガメ調査から子ガメが海に帰っていない9月まで行うようになり、更に長期戦の活動となりました。

1999年、自力でウミガメの展示館を作り、活動は世界的にも評価され、アメリカの国からも10年間支援を受けました。

32年間の活動に参加したボランティアは小学3年生から74歳まで1,000名を超え、その成果はウミガメを最も少ない時の9倍程に増し、多くの人が見学に来るようになり、経済効果も出てきました。

私はウミガメにすまないと思っています。ウミガメを増やすことがなかったら多くの人が来ることもなく、静かな環境で産卵できたかもしれません。しかし、浜を守ってくれたウミガメには大変感謝しています。

山男だった私が好きでもないウミガメと関わり、私の人生はウミガメに狂わされたと言っても過言ではなく、「男の意地」でやり通してきました。

賞を頂く度に深みにはまっていく私、社会貢献支援財団様からの賞を頂くのにも葛藤がありましたが、表彰式に出席して多くの方々が長年に渡り頑張っていることを知り得ただけでも大きな収穫でした。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



▲夜明けまで行う調査前スタイル



▲ウミガメの観察をする前のレクチャー



▲岩場にはまって動けないウミガメ救出



▲小学校での学習会



▲上陸したウミガメの甲長測定



▲毎年世界環境デーに10団体上の協力を得て屋久島の人口の1.2%以上参加で浜の清掃を行っている

NPO 法人 ポケットサポート



岡山県

病気を理由に入院、または自宅で療養している子どもたちに学習支援や学校へ戻るための支援、当事者同士のコミュニティ作りなどを平成23年から岡山県で行っている。代表の三好祐也さんが、5歳のころから病気で入院し、義務教育の殆どを岡山大学付属病院にある院内学級で過ごした経験から、自身が岡山大学大学院を卒業後に設立した。岡山大学病院を拠点に院内学級と病床での学習サポート、長期入院を終え、自宅療養している子どもの家庭を訪問し学習と復学のサポート、学習支援事業に関わる学生ボランティアの育成、病気の子どものための交流会や体験学習などのイベント活動を行っている。

代表理事

三好 祐也

この度は、公益財団法人社会貢献支援財団より「平成28年度社会貢献者賞」を受賞させていただいたこと、大変感謝申し上げます。帝国ホテルでの授賞式は、とても格式が高く緊張しましたが、前日の懇親会で他の支援団体の方々との交流などで気持ちもほぐれました。関係者の方々の優しい心遣いにも触れ、当日はさすがすがすがしい気持ちで式典に臨むことができました。

NPO 法人ポケットサポートは、病気の子どものための支援団体です。病気といっても、風邪やインフルエンザのようなものではなく、小児がん、心臓病などの慢性的な疾患の子どもたちです。彼らは長期にわたる治療や入院により、学習や体験の空白（ポケット）が存在します。そんな子どもたちを支援（サポート）したい。そういった思いから「NPO 法人ポケットサポート」は誕生しました。活動内容は入院中の病棟での学習や交流の支援、また退院後の療養中の子どもに対しても支援を継続し、学校への復学までワンストップの切れ目のない支援を行っています。相談支援は随時行いながら、入院や治療のためにできなかった、様々な体験が行えるような季節ごとのイベントなども実施しています。

子どもたちが安心して過ごせるように、スタッフやボランティアたちは、専門家や家族と連携しながら、子どもとの関係を作っていきます。「病気の子どもたちが将来に希望をもって生活できる」ということを実現するために「学習・復学支援」「交流イベント」「各種相談・機関連携」という三つの柱で活動を行っています。

なぜ、つらい治療を乗り越えながら子どもたちは学習に向けるのでしょうか。小児がんを発症した小学生の女の子は言ってくれました。「だって、勉強しとるときは病気のこと忘れられるんやもん」「将来、看護師さんになって同じような病気の人たち助けたいんよ」自分たちの未来を信じているから、生きる力をもって、闘病しながら

も学習や日々の生活を乗り越えられます。

医療の進歩により以前は救えなかった命が救えるようになりました。重い病気があっても学校へ通う子どもたちは増えています。しかし、彼らへの支援環境にはまだまだ解決されていない社会課題がたくさんあります。ポケットサポートの活動を通して、病気の子もたちが将来に希望をもって生活できるような地域・社会がつくっていきけるよう、スタッフ一同取り組んでいく所存です。

任意団体の頃から続けてきた、病院内での支援活動、また退院した後の学習・復学支援活動や子どもたち家族との交流に加え、法人設立後の社会や学生ボランティアへの教育・育成など、さまざまな活動を表彰していただけたこと。何より設立1年あまりの活動を知っていただき、このような栄誉ある賞を受賞させていただけたことに、感謝と誇りをもってこれからも活動をすすめていきたいと思えます。この度は本当にありがとうございました。

代表理事 三好 祐也



▲通院中の子どもへの学習支援



▲ベッドサイド学習支援



▲音楽学習会



▲交流支援クリスマス



▲交流支援夏祭り

NPO 法人 札幌チャレンジド



理事長
加納 尚明

北海道

平成12年に任意団体として北海道札幌市に設立し、翌年NPO法人格を取得。障がいがある人（チャレンジド）にパソコンの技術の習得援助や社会参加、就労などの支援を行っている。パソコン講習から活動を始め、同法人で働いてもらう就労支援や企業への就労につなげる就職支援を行っている。就労支援では企業からの受注で、パソコン講習講師、画像処理、動画監視、データ入力、ホームページ作成など多岐にわたる仕事を請け負う。就職支援では、日商PC検定3級合格程度のパソコン技能の習得を中心にコミュニケーション講習、ビジネスマナー講習、履歴書の作成などを行い、企業などへ就職するためのサポートを行っている。平成27年度は5人が就職した。

社会貢献者表彰式典に参加させていただき、他の受賞者の方々の活動内容に心から感銘を受けました。今後の活動への大きなチカラを授かりました。ありがとうございます。

NPO法人札幌チャレンジドは、2000年に、『ITで自立をめざす障がいのある人の社会参加と就労』を実現すること理念に設立し、障がい種別に関係なくパソコンを学びたい障がいのある人のサポートから始めました。視覚障がい者や重度障がい者の意志伝達支援なども北海道内で先駆的に始めました。

2003年、札幌市と協働で「札幌市障がい者ITサポートセンター」の運営開始。

2009年、経済産業省「ソーシャルビジネス55選」に選定。

2011年、総務省「情報通信白書」に活動内容が事例掲載。

2015年、実教出版発行「高校政治・経済教科書」に社会的企業の事例として掲載。と多くの方々にご賛同、ご支援いただきながら活動を拡げています。

日本財団にも2002年、2003年、2006年、2008年、2010年に助成をしていただき、活動を拡げる大きな後押しをしていただきました。

2016年11月現在、27人の障がいのある人を雇用できるようになりました。みな一生懸命、企業等から受託した業務に従事しています。先輩が頑張ることで企業からの信頼を構築し、仕事の依頼が増え、次の雇用を生み出しています。雇用の好循環が生まれています。例えば、重度の身体障がいの男性が、在宅で様々な生活支援を受けながらもITを活用してしっかりと働き、給与と障がい年金で自立生活をしています。

企業、行政、ボランティアさんなどのご協力によって、障がいがあってもヤル気も能力もある人がITを活用して働く姿を実現できるようになりました。

一方、社会には、自分の将来を描けない多くの障がいのある子どもたちがいます。親にとっても子どもの将来が一番の心配です。札幌チャレンジドは、16年間で培った

実績を元に、『障がいのある子どもたちのITを活用したキャリアパス形成』に2017年から挑戦を始めます。今回の受賞によって、大きなヤル気、勇気、元気を授かりました。

札幌チャレンジドは、自立をめざすチャレンジドが『ITでマザル・ハタラク・拓き合う。』社会を創ります。

理事長 加納 尚明



▲事業所入口タイルカーペット（視覚障害者への配慮）



▲就労継続支援A型ブース



▲移行支援利用者の学習風景



▲ボランティア養成講習



▲パソコン講習



▲雪道氷割ボランティア

NPO 法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ



兵庫県

「女性や子どもがのびやかで安心して自分らしく生きられる社会をめざして」を目標にDV被害の家族の生活保護や、自立に向けた活動へのサポートを平成4年から神戸市で行っている。同16年にDV被害者及び家族の一時避難所として開設されたシェルター「ともだちの家」は、公的機関の保護を受けられなかった女性や子どもの最後の砦となっており、これまでに300組を保護してきた。助けを求める相談の電話から面接を経て、必要に応じて弁護士や警察等への付き添い、シェルターへの緊急一時保護、その後の生活再建までの長い支援を行い、シェルターを出てからの就労準備支援や相談に応じるためのセンターの運営も行っており、シェルター利用者以外でも地域のシングルマザーが集う場所になっている。その他、女性に対する暴力を無くすための活動も行っている。

代表理事

正井 禮子

2014年の内閣府の調査によれば、既婚女性の4人に一人がDVを経験しており、そのうち9人に一人は生命の危険を感じるほどの暴力を体験しています。しかし、暴力から逃れるには安全な住居の確保と自立できるまでの経済的支援が不可欠です。

当団体は95年の阪神・淡路大震災を契機に、DV被害女性支援に取り組むようになり、2004年に民間シェルター「ともだちの家」を開設し12年になります。電話・面接相談を通してDVに関する正しい情報と社会的資源を提供し、必要に応じて、病院や役所等への付き添いや危険度の高い場合にはシェルターを案内しています。

これまでに300組の女性や母子を保護しその後の生活再建も支援しています。しかし、民間シェルターへの公的な財政援助が乏しいため、ボランティアの熱意と助成金等でなんとか運営しています。

DV家庭で暴力を目撃して育つこと＝面前DVは、子どもにとっても心理的な虐待であり児童虐待と認識されるようになりました。子どもたちが暴力による問題解決を学んでしまうことは、地域社会へも大きな影響を与えます。心身の回復には長い時間がかかり、その後の生活再建も困難です。シングルマザーの貧困は子どもの貧困や教育・健康格差にも繋がります。

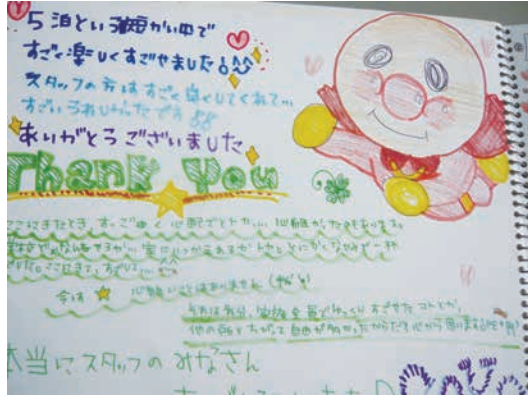
2013年に神戸市内で「WACCA（わか）」という居場所を開設し、孤立しがちなシングルマザーの相談や仲間づくり、子どもの学習支援等を無料で始めました。2015年から若年女性やシングルマザーが高認定資格や各種資格取得のための学習支援を無料で行うWACCAスクール（保育あり）も開設し、2015年度の利用者は延べ3,037人です。

その他に、DVの被害者も加害者もつくらないため、中・高・大学生など若い人を対象にデートDV防止出前授業を実施し、これまで17万人に提供しています。

民間シェルターはDV被害女性と子どもたちの最後の砦であり、公的な保護事業を補完している貴重な社会資源です。「WACCA」もさまざまな困難を抱える女性や子どもにとって地域の居場所として定着しつつあります。DV被害女性や子どもを支援することは、地域社会にも安心と希望をもたらします。今回の受賞は、疲弊しがちな

ボランティアスタッフへの大きな励みとなります。心より感謝申し上げ、これを機に、民間シェルターの活動、その後の生活再建支援の必要性等を知って頂き、支援の輪が大きく広がることを願っています。

代表理事 正井 禮子



▲シェルター利用した子どもが利用者ノートに書いたもの



▲WACCA でひとり親の子どもの学習支援



▲シェルター内部



▲シェルター内部



▲シェルター内部



▲WACCA で子ども達とクリスマス

認定 NPO 法人 ロージーベル



宮城県

宮城県で東北・北海道の少年院で放送される DJ 番組を制作放送する活動を行っており、番組を聞いた少年院の少年から寄せられる相談内容は出院後の不安に関するものが多いことから、出院後一時的にでも彼らの生活基盤を整えると共に、「帰る家」の必要性を感じ、平成20年に5ヵ年計画建設に向けて準備をスタートさせ、NPO 法人化した。その間、東日本大震災が発生し、急きょ少年らの受け入れが必要になったことから、借家にて運営を開始した。これまでに行き場のない少年を31人受け入れ、家庭を伝えつつ、衣食住の提供、就職先の紹介や生活相談に応じ、更生を促し社会へ送り出している。少年たちをサポートする人材を養成するボランティア養成講座の開催も行っている。

理事長（施設長）
大沼 えり子

「僕、生まれて今が一番幸せです。施設長の幸せって何ですか？」

「君たちが毎日しっかり頑張っている姿が見られること、幸せだって言うこと、それが私の一番の幸せです！」

「本当ですか？ そんなことが幸せなの？ 本当に？」

「本当！ だから今、私はすごく幸せ！」

「ありがとうございます。僕、もっと頑張ります！」

これまで笑うことを知らなかった少年たちが心から嬉しそうに顔を綻ばせる瞬間。そんな心躍る時を共有できる幸せが体験出来る人は、世間広しといえどそう多くはないだろう、その奇跡のような時間を私は幾度も体験しています。

家族がいなかったり、虐待などの理由で帰る家がなかったり、社会からも弾かれ、安住の地はなくされど生きるために非行に走ってしまった少年たち。そんな彼らの帰る家、それが当法人の運営する「ロージーハウス」です。誰もが経験するはずの家庭のあたたかさや、家族の姿を体験できなかった少年たちに、家族を伝え、安心して生活できる居場所を提供し、自立に向け手助けをする。そこにはいつも関わる人々の愛溢れる優しさとあたたかさが少年たちを包んでいます。

2001年に始めた少年院 DJ に寄せられた在院中の少年からの手紙に込められた「助けて」という心の叫び、その声に呼応した仲間たちが集い、「たった一つの笑顔のために」をスローガンに、2008年、法人を立ち上げ、2010年に借家にてハウス運営を始めましたが、非行というだけで、その裏側に隠れている事情を知りえない近隣の皆さんの理解を得るまでに2年がかかりました。日々努力を重ねた結果、現在は受け入れて頂き、これまで31名の少年を受け入れ、29名が自立を果たし、2016年12月現在2名の少年がスタッフのあたたかな見守りの中で自立に向け、日々奮闘しています。

今回、この表彰式に参加させて頂き、様々な活動に取り組みまれておられる個人や団

体の皆様がおられること、そしてその皆様の志の高さに触れることができ、衷心からの敬意とともに背筋の伸びる思いがしました。また、安倍昭恵会長・内館牧子副会長・日本財団笹川陽平会長より頂戴致しました、あたたかな労いのお言葉が心に響き、益々の意欲を奮い立たせました。

頂戴したこの栄に恥じることなきよう、今後もどんな苦難にも屈することなく、「たった一つの笑顔のために」この小さな灯を消さぬよう、日々精進を続けて参る所存でございます。

この度は、素晴らしい賞を頂戴し、誠にありがとうございました。

理事長（施設長） 大沼 えり子



▲少年院 DJ 収録風景



▲ボランティア養成講座



▲ハウスの少年達と芋煮会



▲少年院へのクリスマスプレゼント CD の収録



▲少年と理事長



▲ハウスの少年達と芋煮会

岐礼さくら会



代表
國枝 均

岐阜県

岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲岐礼地区で平成4年に地元の中壮年12人で河川環境の整備や美化運動に設立された任意団体。岐礼谷川兩岸の桜の植栽、紫陽花の植栽、河川の清掃、下刈り、枝払いなどを地道に続けてきた。桜や紫陽花の咲く季節には地域住民の憩いの場として小さな観光地となっている。活動資金は無く、すべて会員が個人で自前の機材を調達し行っている。平成元年の大型台風で岐礼谷川が決壊氾濫し大規模な被害を被り、4年近くかかった復旧工事が終わったことをきっかけに活動が開始された。

(推薦者：堀口 賢一)

このたびは、岐阜県の山間部において地道に美化活動や、河川の清掃活動を続けている私たち【岐礼さくら会】が社会貢献表彰の栄に浴し、東京【帝国ホテル】において過分なる表彰の式典にご招待を賜りまして誠にありがとうございました、会員一同心から感謝とお礼を申し上げます。

平成元年9月、岐阜県美濃地方を襲った集中豪雨により、私たちの住む岐礼谷川が氾濫決壊し住家は、床上、床下浸水が多数発生し、一時は孤立状態にもなり、この時に住民の絆が一層高まりました。被害総額は10億円にも達し国及び県の温かいご支援で災害復旧工事は無事完了致しました。

そこで、この工事の竣工を機に、当岐礼内に住む中壮年層が中心になり、初代会長に故小椋英昭氏が就任し10名で、平成4年4月から【岐礼さくら会】として発足しました。その活動は、伊勢湾の源流である岐礼谷川の環境を良くしようと、活動資金は無いままに自前の資機材を持ち寄り、川の兩岸に桜の植栽、紫陽花の植栽「故小椋会長の水田30アールにも紫陽花花園を整備」下草刈、枝払い、整枝、河川の清掃等美しい河川環境の整備を行ってまいりました。これまでの功績は、昨年ご逝去された初代会長小椋英昭氏の並々ならぬ努力の賜であると思っております。

近時、当地域もご多分にもれず、少子高齢化と1人暮らし世帯が増加する中で、少しでも多くの会員を求め、小椋氏の遺志を無にすることなく、美しい河川環境の整備に引き続き務めてまいりたいと思っております。

一方、地域住民の憩いの場、小さな花の観光地として観光振興や社会貢献活動にも繋げ、後継者の育成や過疎脱却に向けた地域の活性化と住民の移住安住に少しでも貢献できるよう会員一同心に誓っております。

今回の表彰を契機に会員も17名に増え、自分たちの郷土を美しくしようという機運が一層高まってまいり、他の地域の模範にもなりつつあります。

最後に素晴らしい表彰式にご招待下さいました安倍会長はじめ関係皆様方のご健勝と貴財団の益々の御隆盛を心から祈念申し上げます。

誠にありがとうございました。

代表 國枝 均



▲ 会員の皆さん



▲ 住民の憩いの場になりました



▲ 桜を植樹



▲ 機材も持ち寄っての作業



▲ 紫陽花の手入れ



▲ 川の清掃をしています



▲ 草刈り中



▲ 川辺に植えられた桜が咲きました

社会福祉法人 太陽の家



副理事長
山下 達夫

大分県

整形外科医の中村裕博士が昭和40年、大分県別府市に創設した社会福祉法人。中村医師はスポーツを通じた心身のリハビリテーションを導入しようと、障がい者スポーツの普及に尽力し、様々な困難を経て日本初の身障者スポーツ大会の開催や世界大会への参加を通じ、障がい者スポーツに対する世間の認識を改めさせ、その後、東京パラリンピックが開催されるまでになった。しかし、中村氏は、障がい者には収入がなく、仕事をしたいと思っていることに気付き、彼らのための雇用の場を作ろうと「太陽の家」を別府市に開設した。その後、オムロンと提携し共同出資会社、オムロン太陽株式会社が太陽の家の敷地内に設立され、多くの障がい者の雇用が可能になり、初年度から黒字を計上するまでになった。この成功に大手企業も追随しはじめ、街に障がい者が多くなったことで地域の人々も協力的となった。現在、太陽の家には、バリアフリーの住宅、トレーニングルーム、体育館、プール、温泉、障がい者が働くスーパーマーケットもあり、隣接する駅もユニバーサルデザインで銀行を含め全ての施設は障がい者にとって働きやすく暮らしやすい環境が整っている。

この度は、社会貢献支援財団より荣誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。振り返れば、創設者の中村裕が尽力して1964年に開催された東京パラリンピックの翌年、「No Charity but a Chance! (保護より機会を!）」を理念に障がい者の働く場として、中村裕は太陽の家を設立しました。

自転車操業の苦しい時代を経て、創設から7年後の1972年に立石電機株式会社（現オムロン）創業者の立石一真氏のご理解とご支援を得て、初めての共同出資会社、オムロン太陽株式会社を設立しました。これをきっかけに、ソニー、ホンダ、三菱商事、デンソー、富士通エフサス、本田技術研究所と共同出資会社を設立しました。それぞれの会社では、障がい者と健常者がほぼ半数在籍し、一緒に働こうという理念を持っています。創設から間もない頃は、障害者雇用促進法、特例子会社法など障がい者の雇用を促進する法律が未整備の時代でしたが、オムロンの立石一真氏、ソニーの井深大氏、ホンダの本田宗一郎氏などは、障がい者も働いて税金を納めるべきだという太陽の家の考え方に共感し、出資していただきました。

太陽の家は、現在、大分県別府市、日出町、杵築市、大分市、愛知県蒲郡市、京都府京都市に事業本部があります。2016年現在、共同出資会社8社と協力企業までも含めると、約1,200人の障がい者・高齢者と、約700人の健常者、計約1,900人が共に働き、生活しています。

太陽の家の本部がある別府市亀川は、住宅街の町です。敷地内には、スーパーマーケット、銀行、クリニック、スポーツセンター、温泉（公衆浴場）などがあります。また、周辺には、駅や居酒屋、パチンコ店があり、太陽の家は、障がい者も健常者と共に生きる共生社会の実現を追及し実践しています。人口10数万人の市で、世帯も含めれば2千人を超える人々を、経営者は大事な顧客として捉え、進んでバリアフリー化しています。

太陽の家の就労訓練部門では、1980年代より職能的に重度の障がい者の受け入れを積極的に行ってきました。さらに、ADL全介助の障がい者も受け入れる生活介護施

設を80年代の終わりに設立しました。2000年に入ると、日本は人口減少高齢化社会を迎え、核家族化が進み、地域社会の崩壊が顕著になってきました。社会から取り残され「孤立」し「排除」される人々が急増しました。そこで2007年より「ソーシャル・インクルージョンの実現」を理念に加え、精神障がい者や発達障がい者の就労支援、高齢者の自立支援、生活介護支援に取り組んでいます。

2015年10月、太陽の家は創立50周年を迎え、天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、記念式典を執り行いました。2020年、東京が世界で初めてパラリンピックとオリンピックを2度開催する都市となります。先進国の仲間入りをし、欧米にお手本のなくなった日本が2020年にどのようなパラリンピックを実現するのか、日本ならではの障がい者と健常者の協調のあり方を提案できればと思っています。

理事長 中村 太郎



▲創設者の故中村裕博士



▲太陽の家本館（2011年完成）



▲別府工場（日本初の身体障害者福祉工場、現就労継続支援A型事業所）



▲三菱商事太陽株式会社



▲サンストア（日本で初めて車いすの障がい者がレジで働くスーパー）



▲富士通エフサス太陽株式会社

NPO 法人てーねん・どすこい倶楽部



東京都

東京都墨田区で、定年を迎えた人たちが主体となり、それぞれの経験や技能、趣味や特技を活かしたボランティア活動で、地域社会に貢献・参画して住みよい地域づくりを目指そうと、平成14年に結成されたNPO法人。シニア人材バンク部をはじめ様々な分野の部を設けて活動しているが、同20年から「すみだ日本語教育支援の会」と協働で行っている外国人介護従事者を対象とした日本語教育の支援活動は、受講者一人一人の目的に合わせ細部にわたる指導を行い国家試験合格者を輩出したり、厚生労働省へ介護福祉士試験の問題について、受験する外国人に配慮するよう要望書を提出するなどのバックアップ活動なども行い、地域の外国人介護従事者に欠かせない存在となっている。

理事長
増澤 秀男

この度は荣誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。

表彰式では安倍昭恵会長のご挨拶に続き、内館牧子表彰選考委員長のお話をいただきました。また、祝賀会におきまして、会長が受賞者、関係者の皆様と一緒に記念撮影をしていただきありがとうございました。私たちの活動が評価をいただき今後一層の励みになります。

活動はシニア人材バンク登録・派遣、養護施設での個人支援、囲碁、将棋の相手、子育て支援、シニア向け情報紙づくり、高齢者対象のセミナー講演会、生きがい講座開催、ITの講師派遣など、食育については食育推進を支援するなど、行政と協働で行っています。

平成20年に都区の支援のもと、墨田区内にある特別養護老人ホーム、デイサービス、居宅介護などで働く、日本人を配偶者に持つ外国人のための日本語教育を支援し、生活者としての外国人の地域参加と地域福祉事業活性化を目指し、「日本語教室」を通じて、介護人材の育成や確保を目的として「すみだ日本語教育支援の会」が発足し、その後、平成22年に墨田区の委託事業として「日本語教室」が社会福祉法人賛育会、早稲田大学大学院の先生方により、講座を無料で開講、てーねん・どすこい倶楽部々が補助講師として参加し、生徒をマンツーマンでサポートしています。

生徒さんは、フィリピン、タイ、ペルーの方々に、日常会話に不自由はありませんが、読み書き、漢字、特に専門用語は介護福祉士国家試験にはハードルが高く、2、3点の差で不合格となっていました。平成24年に介護福祉士1人、27年に介護福祉士2人とケアマネージャー1人が合格しました。皆さん、介護の仕事は楽しいと頑張っています。

てーねん・どすこい倶楽部々は、日本語教室を支援しながら介護の勉強や研修に

参加して努力を重ね、生徒さんと共に成長していると感じ、外国人や労働者としてではなく、同じ地域に住む仲間として支援するのは当然という意識で参加しています。

最後になりましたが、社会貢献支援財団の皆様方には行き届いたご配慮をいただき感謝申し上げます。

理事長 増澤 秀男



▲セカンドステージセミナー（高齢者を対象にしたイベント）の様子



▲わんぱく相撲でのボランティアもしています。



▲子育て支援センターでのボランティアの様子



▲子育て支援センターでのボランティアの様子



▲小学校での認知症サポーター講座の様子



▲日本語教室みんなで記念撮影



▲日本語教室授業風景



▲日本語教室授業風景



▲日本語教室授業風景

多田 千賀子



兵庫県

兵庫県姫路市内で美容院を経営しているが、平成19年ごろから知人や来店者から自殺や孤独死、認知症者の徘徊などの話を聞くようになり、その原因は、話し相手もない高齢者の一人暮らしの増加や、近所付き合いの少ない孤独な暮らしにあり、いずれは自分たちもその仲間になる恐れは明白だといった思いから、隣家の空き家店舗を購入し、“一日中いても100円”の「いきいきセンターみんなの広場（以下広場）」を平成20年に開所した。広場では利用者の意見と情報を参考に様々な教室を催したり、市から不要になって譲り受けた卓球台を設置したところ、子どもと高齢者の卓球交流が盛んになったり、うつ病や認知症の人が人とコミュニケーションをとることで症状が軽くなるといった効果がみられている。

（推薦者：永嶺 静昭）

平成28年11月27日11時55分、東京駅ホームに立つ。

夢の24時間の始まり！ お出迎えは真っ赤なバラ、装花のプリザーブドフラワー。洋服の長い裾をひいて長い階段を駆け下りてくる美しい女性。こんなシーンを映画かテレビで見たことがあった。日本最初の本格ホテル“帝国ホテル”圧倒された一瞬。

チェックインまでの間、広いロビーのソファに腰かけ、これから始まる未知の世界、セレモニーの始まりに不安と恐れ、又期待、身震いするような思いの一瞬の始まりに心引き締まる。

「シニア世代どう生きますか」と、問いかけて始めた“いきいきセンターみんなの広場”はきれい事で始めたわけではない。一日いて百円の利用率収入、有難かった。

その1年前、ご主人を亡くし、語る事のなくなったうつ病の老夫人との沈黙の時の流れ。又広場の前を、シルバーカーを押し、行きつ戻りつしている老女。声をかけると「帰る道がわからない」と。夢を現実につかもうとする中学生との語らいには、応援してやりたい気持ちが自然に沸いてくる。こんな日々、こんな時、社会貢献者表彰の授与の吉報。

式典に出席するも厳粛なものだった。スタッフの皆さんも温かかった。受賞の方々の自信、誇り、強さ、生きている顔を見た。貴財団の細やかな気配り心配りに感謝いたし、生涯最初で最後、最高の招待を受け、時を過ごした。心豊かに帰姫。

全国紙姫路版が受賞を取り上げている。地元紙が特集で掲載している。

新聞の反響は大きい。夫婦で来られる方、友達グループで来られる方。電話での問い合わせ、満足な対応、接客は出来ていない。反省しながらも本来の目的は？と、振り返る。

今、“新聞を見た”と初老男性がバスを乗り継いで毎日の様に来られる。

36年前、北海道から大阪に来、リタイアして姫路へ来た。マンションで1人暮らし、人との付き合いはない。と、こういう方の利用こそが本来の広場の目的。興味本位、見学はいささか見当違い。

12月18日（日）、感謝会を催した。影で力を貸して下さる方、協力して下さる方、又日々利用して下さる方々と共に頂いた賞です。

乾杯は、小学生2人と93歳の最高齢女性。35人の出席。楽しい一日を終えたが課題が残る。

先に変化を望めない高齢者と好奇心旺盛な子供たちの対応、彼らの発想は想像がつかない。危険と背中合わせ。今、彼らの反省文を待つ。願いは毎日笑って暮らす人が増える事、貴財団の精神、地道な活動を続ける事。ふらっと来て、帰りをせくわけでもなく、筆を持つもよし、ラケットを振るもよし、マイクを握るのもよし、駒を進めるもよし。今趣味の友を作り、茶をすすり、語り運動し、“一日が楽しかった”と思え、思える明日がきますように・・・めげない。逃げない。くじけない。ありがとうございました。



▲老人体操



▲「出る杭」大会



▲「出る杭」大会



▲歌楽会



▲将棋教室



▲卓球 子供と高齢者交流

池上 千寿子



埼玉県

幼少期や進学時に「女のくせに…」と投げかけられた性差別発言が起因となり、国内やアメリカで女性史やセクソロジーを学び、タブー視されがちな、人権にまつわる「性」の問題に取り組み、世の中の性に関わる定説は「思い込みと偏見である」と執筆や翻訳、社会活動を通じ「性」についての啓蒙活動に取り組んでいる。1982年、ハワイ大学「性と社会太平洋研究所」に所属、アメリカ本土でエイズ発見によるパニックと差別報道に接しアトランタで開催された第1回国際エイズ会議に出席し、ハワイエイズ NGO 活動に参加以来「性・社会・エイズ」をテーマにしている。1994年にNPO「ぶれいす東京」を設立し、種々のプログラムやトレーニングの実践を始め、アジアで初の国際エイズ会議開催に尽力した。HIV 陽性者への直接支援を中心にコミュニティや行政、医療と信頼関係を気づきながら「研究と研修・直接支援・予防啓発」を掲げ活動している。

(推薦者：武井 優)

1975年、メキシコシティーで開催された第1回国際婦人年国際会議にフリーのジャーナリストとして参加して以来、性とジェンダーをテーマに活動を続けて50年がたちました。50年前、性や体についてはほとんど情報がなかったし、とくに女性が性を語るなどタブーだったのですが、ウイメンズリブという新しい女性運動により女性たちが性について語り始め多くの著作が生まれました。それらを翻訳して日本の仲間届けながら、セクソロジーという学問領域があることを知り、1982年にハワイ大学「性と社会太平洋研究所」でミルトンダイアモンド博士の教えを受けました。それはちょうどエイズが登場して1年目のことでした。エイズはHIVというウイルスによる後天性免疫不全症候群のことですが、HIVは主に性感染でしかもゲイの男性から感染が広がったために、理不尽な差別や偏見にさらされてしまいます。それにより「性、病気、社会」というあらたなテーマをいただきました。

ハワイでエイズ NGO 活動に参加し、性感染は社会的病であり、医学だけで解決はできないこと、性についての基本的な理解が社会に必要なことに気づき、日本でエイズ NGO ぶれいす東京を設立しました。しかしエイズの活動といえば事務所も貸してくれません。性感染は自己責任でなぜ支援活動などするのか、という目でしかみられませんでした。

それでもつねに仲間恵まれ、「直接支援、予防啓発、研究研修」という3本柱での活動を続けてきました。毎年9月には新人ボランティア研修を行い、毎年20人ちかくの研究終了ボランティアが誕生します。とくに最近ではHIVとともに生きながらボランティア活動に参加する人が増えました。かつて支援活動プログラムに参加し、自分は一人ではない、仲間がいることで力を得、次はプログラムを企画運営することで社会参加、仲間支援につなげようということで、NGO活動の醍醐味ではないかと思えます。

現在はぶれいす東京の理事、性教育協会の運営委員、エイズ&ソサエティ研究会議副代表などを兼任し、中学や高等学校で性教育を実践したりしながら、行政、医療、

民間の協働による社会環境整備「だれもが安心して病を発見し、安心して病とつきあえる社会」をめざして活動しています。性は生きることの基本にありますが、敬遠されてばかりいます。今回社会貢献表彰をいただいたことはほんとうに励みになります。各地に多くの仲間がいることを知り、力をいただきました。ありがとうございます。



▲日本性教育協会協賛のセミナー



▲アジア太平洋性科学会議でポスター賞授与



▲ぶれいす東京事務所のスタッフ



▲性科学セミナーでの講演 埼玉2015年10月10日



▲全性連大会で恩師ダイヤモンド博士と



わたしたちはここにいます

▲ぶれいす東京 HP の画像